
猫耳事件

朋也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫耳事件

【Zコード】

Z8941U

【作者名】

朋也

【あらすじ】

ある日、小6の高橋翠（主人公）は高3の兄の作った薬がたくさん入ってる倉庫を整理していたら、一つのビンを割ってしまう。そしてその薬の効果で猫耳と猫の尻尾が生えてしまう。さて主人公はどうなってしまうのか？

ネ・・・猫耳？

はあ。

疲れた。

今日は兄ちゃん（高橋 耕輝）の作った薬の倉庫の整理を手伝つて
いる。

僕「これはこっちで…（パリン）あ、割っちゃつた。

「何割つたんだよ！」

「猫ミツミーって書いてあるけど・・・」

それをいつた瞬間兄は外に逃げた。

そのとたん薬が倉庫の地面全体に広がつた。

一気に地面がスケートリンクみたいにツルツルなつて転んでしまつ
た。

僕「う・・・イタタタ・・・」

そうして僕は頭と尾てい骨から違和感を感じた。
頭を触つてみた。

「ん？ なにこれ？」

それから尾てい骨あたりから出でるもの引っ張つて前に出してみ
た。

僕「痛つ…痛い？」

そこには白い猫の尻尾だった。

ポケットにある折りたたみの鏡で頭を確認したら

「猫耳…？」

そうすると兄は棒読みでビンのラベルに書いてある薬の説明を読んだ
兄「この薬は広がりが良く部屋にいる人全員に仕掛けることができます。

体に少しでも触れると効果が表れます。

半年から1年で効果は切れますが場合によつては10年たつても戻
らないことがあります。」

僕「えええええ
WWWWWWWWWWWW

僕は笑うしかなかつた

それと一緒に涙も出た。

元·自業自得

儀

そうしてドタバタな生活が始まつたのであつた。

猫に近い・・・といふが猫

兄「・・・ずっと見てるとかわいく見えてくる・・・」

僕「え・・・?」

兄にはそういう趣味があつたのか・・・

「しつぽ・・・」

そういうつて僕に生えたねこの尻尾を触つてきた。

僕「痛つ!」

今日初めて尻尾をつかまれた時の猫の気持がわかつた。

兄「猫耳が反応してゐる…カワイイ」

なんだ!この兄の圧力は!すゞしーすゞさめるー

・・・本氣でそう思つた。

そんなこと思つていたら兄が猫の本を持つて聞きた。

兄「尻尾の動きと猫耳の動き…と。」

僕「いれからぢりじよつ・・・恥ずかしい」とこつぱーあるだらうし…」

兄「翼のさう言葉と動きが連携してゐる!」

僕「ひどいにや・・・え?にやがつにちや!」

兄「3日!」とにかくがつく日がやつてくるとこつ裏設定!」

僕はイライラした。

兄「尻尾が左右に揺れていゐつて!とはイライラしてゐつて!とか

…」

え?自分の意識と関係ないと思つたのに…せりに恥ずかしい!

僕「もう嫌みや――――――」

続く

猫に近い・・・といふが猫（後書き）

ちょっぴりオマケ

僕「僕：自分がかわいく思えてきたみやあ？・・・」

兄「副作用としてまたたび、煮干が好きになります。」

僕「エ！またたび？またたいほしきみやー！」

兄「ｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ

僕「…」（怒）

やうじていつも生活は変わった。

僕「学校休む…といつかそうしないとヤバイにや」

兄「行け。学校は体調を崩さない限り行かなきやだめだ。」

僕「これだって病気と同じようなものじゃにやいか！」

…とまあこんな感じで10分くらい口論が続いた。

結局行くことになってしまった。

僕「猫耳は帽子でかぶせられても校内ではとるし、尻尾は長くて隠せないし、仮に隠せたとしても痛いし、体育の時など着替える時どうすればいいんだにやあ…」

兄「頑張れ。」

僕「見つかったら大変なことになるのは見てるみやあ…」

兄「頑張れ。」

でも今日は体育がなかつた。

僕「やっぱり猫耳・・・」

心配したが今日は運が良かつた。1、2時間目は自由習で、後は先生が休みだったので代わりの先生で、帽子をとりなさいとは言われなかつた。

5時間目は学校のクラブ活動でパソコンクラブだったので着替えなくばれることはなかつた。

でも尻尾は授業中でも、いつでもムズムズくすぐったいし、少し痛かつた。

夜になつて母親が帰つてきた。

兄「ちゃんと説明しといた。」

僕（怒）

母「あら、なかなかかわいいじゃないの
僕（もつと深く考える…）

母「はいはい猫ちゃんエサの時間ですよ~」

僕（兄ちゃんに変なこと絶対に母に言つたな…）
そう言つて母は猫缶を持ってきた。

兄は僕に目線を合わせて笑つた。

僕「こりんにゃの食えにゅいよ！」

母「あら、恥ずかしがつているのね。猫けやん？」

…ん？意外と食えるものだ。

人間が食べてもおいしいものなのか？

いや…違つ今の僕は表すと半猫化しているからだ・・

母「わつき急いで買つてきたのよ。感謝しなさいね。猫ちゃん。

あ、あとまたたび入れといたから。」

兄「またたび入れたの？またたび抜けるまで言葉が・・・

僕「にゃあ？（どうなるの？）

兄「まあこうなるんですよ。」

僕「にゃああ？（なんか変なこと言つた？）

風呂の時間の5分前

僕「はあ…洗つところが増えた。猫耳もシャンプーか？尻尾はボデ

イーソープかにゅ？」

母「いいえ。全身猫用洗剤。」

僕「僕はペットじゃないし猫じやにゅ…」

母「猫体質。猫肌。でしょ、耕輝。」

兄「そう。猫になつてないとこにも猫と同じ感じになつていいから。

母「やっぱり翼は天才ね！」

僕「許せにやーい…（怒）」

ペットみたいな扱いをされて風呂でも兄に猫用洗剤で洗われて…と
いうか水にあたつたりかぶつたりすると不快感がする…これも猫体
質の関係か…

それよりも心配なのは体育がある明日の学校…

ちよつぴりつオマケ
母「猫耳姿の翼はカワイイ！前から猫が飼いたくて・・・」

僕「あ、ちよつそこはダメえ・・・んにゃ～お？」
母「やつぱり猫ね！ 次は猫じゃらしー！」

僕「にゃおーにゃおー！」

母「wwwwww」

僕「：（怒）」

夜はたいへんだけ朝は恥ずかしい…それが半猫生活といつまの?

ジココココココ…ピコンー

目覚まし時計が鳴つて僕は起きた。

兄も僕の目覚ましの音で起きた。

僕「夢…じゃなかつた…」

僕は起きた時昨日の出来事を一瞬、悪夢だつたらいいなと思つたがやつぱり猫耳と尻尾は生えていた。

兄「おはよ~。」

僕はつぶやいた。

僕「学校…」

兄「頑張れ。」

僕「小6の男が猫耳生やして学校行つたひじつなると毎つー・?」

兄「可愛がられる。」

僕「それだけですか?」

言葉のキヤツチボールのようごろづくよく兄とのケンカ?が始まつた。

一瞬、3回「元気」と「元気」がつづく効果の日だけ休むなんて考えてしまつた。

一階のリビングに降りた。

母がいた。

母「猫ちゃん? 今日もかわいいわねえ~」(ナデナデ)

僕「だから僕は猫でもペットでも…あ…元気~ん

僕はもう人間として扱われてないと思つた。

… どうか扱うとかいう言葉の時点でおかしい。

僕「まさか猫缶じゃないよね？」

母「朝はキャットフードだから安心しなさい。」

僕怒

玄関に猫の餌をいれる器があつてその横にはボウルに水が入つてい
て、餌をいれる器にはキャットフードが入つていた。
なんだかすごく恥ずかしかった。

母「ハーヴィまたたびよ、猫ちゃん？」

母（笑）

僕には二にせず！

卷之三

気が付いたら餌を食べていた

僕「にやくん（なつ…なにを僕はしているんだ！）」

母一 やつはりかわいい?

ああ…あと1時間で学校に行かなくちゃならない…

יְהוָה־בְּנֵי־עַמּוֹ

(泣)

夜はたいへんだけど朝は恥ずかしい…それが半猫生活とこりもの? (後書き)

ちょつぴりオマケ

母「猫ちゃん？ 煮干よ~」

僕には煮干し

(沈默)

母「食べていいのよ。」

僕にやあ（兎）

母「人間だつたらあり得ないこと。」

僕
(怒)

僕「兄ちゃん、今頃なんだかじどうして倉庫の床はツルツルになつたのにや？あれ？にやがつくにや！」

「…それでどうしてツルツルになつたの？」

兄、一時的に摩擦を少なくする薬が入ってる

十七

兄「なる。後、今頃だけどあの薬はいたずらによく作ったやつだけ
で、庄蔵はいつも本余裕で越えてる。

僕「隠し持つとかわることも…」

あやしまれる学校生活 ～登校班～

あれこれあつて学校に出かける時間。

僕「どうしたらいいんだろう~」

母「あら、言葉が戻った……」

僕「ガックシしなくてもいいだろ……」

母「」

僕「固まつてる……」

僕「ひとまず尻尾はズボンの中に……飛び出しちゃうな……尻尾の力を抜いて……しつして入れる！」

僕「猫耳は帽子で……体育」

僕の頭の中には、いやして何が何だか分からなくなってしまった。

僕は賭けに出た

僕「帽子をかぶつて教室では言い逃れ、体育の着替える時はトイレ

！」

あまりにも単純すぎる答えにたどりついた。

帽子が少し浮くのは少し不快感があるけど無理やり押し込んだ。

僕の学校周辺は交通量が多く、国道もある。だから集団登校。さつそくここでばれる危険。

友「帽子なんて珍しいね～…というより今日、日差し強くないよ?」

「聞かれた時のセリフ考えてなかつた…

そうして言つた言葉が

僕「帰り強くなると困るからさあ～」

そういうた瞬間はよかつたけど

友「でも今日午後は雨だよ?」

ああ…早いがもう考えがない…いつそのこと事実を…いや…笑われたり、でも男の猫耳プレイでも何でもないし性的なこと本気で考える時期じゃないし…　混乱。意味不明

友「どうした?」

僕「ま、まあ学校に着いたらゆづくじと…」

友「は?」

登校班に集まる人が全員集まつた。

そして片道1・5キロ、大体30分～早いと15分くらいで学校につく。

僕「…登校班はクリア～」

あやしまれる学校生活 ～登校班～（後書き）

ちょっぴりオマケ

兄「そういえば本々の耳どうなった?」

僕「機能しない…」

兄「猫耳が本物で本々の耳が飾り物。と…メモメモ」

僕「そいいえば無意識に音楽聴くときイヤホン猫耳につけてた…」

兄「無意識に猫耳を本物の耳と認識している。と…メモメモ」

僕「いちいちメモるな」

兄「尻尾はなでるとどうなるか」

僕「え?」

兄(ナデナデ…止)

僕「ああ～もつとあ～」

兄「気持ちいい?」

僕「言いくらいが気持ちよくなつたらやつてほし〜」

兄「弟の半猫化は精神的にだけ進んでる」

僕「いやあ〜〜〜

兄「??.?.?..」

朝休みの学校にて

翼の学校では8時25分まで朝休みがあり8時30分に普通、登校班はみんなつく。

委員会など朝の準備をするようにあるものだ。

ひとまず教室について朝の準備をしてると友が話しかけてきた。

友「で、さっきの「ま、まあ学校に着いたらゆづくつと…」ってなんだ?」「

僕「え、あ、なんでもない…」

友「で、帽子を今でもかぶっているのはな…」僕「ファンシヨンです」

友「いやいや多分ちがうと思…」僕「いいえファンシヨンです。」

友「帽子なんではやつてないよ?」「

僕「そう?かな?」

友「まあ学校では帽子を脱いだよね。」バツ

ああ、もう終わつた…近くにいる人の目線が僕に集中する。

友「wwwwwwwww何それ「スプレ?」

僕「」

どんな言葉を発していいかわからなかつた。

教室にいるほとんどの人「

……
W W W W W W W W W W W W

僕「めんどいことになつた」「…」

僕「そんで… そうなつてペラペラ… 以下略」
女子「猫耳付いただけでかわいー」ナデナデ

全然話を聞いていない。

僕「そんで… 以下略」

友「よく見ると尻尾が…」バサツ

出された。

僕「あ、しつ… つて出すなよ！」

友2「尻尾柔らかい」モフモフ

僕「む、触るな… ふにゃーあ」

教室にいる以下略「かわいい」

そんなに今の僕ってかわいいの？

予想外の展開、そして羞恥心で頭がいっぱいになつて目の前が真っ黒になつてしまつた。

気がつくと保健室。

僕「ん~…僕はいつたい・・・」

保険の先生「こつちが聞きたいわよ」

僕「あ~…説明する必要がありそうだな」

先「へ~そつこい」とだったの~…でお母さんとかに行つた?」

僕「いや…事情を説明したところで…中略…とこつことで以下略」

先「そんで3日に一回又は運が悪い時は「こちがつくとこつ」とですか…あ、もつこんな時間」

先「そろそろ授業ですよ。クラスに人ほとんどに知られたんでしょう。恥ずかしいなら帽子かぶつてもいいよう担任の先生に言つときます。尻尾は露出するとして…。

あ、あと運んでくれた人に感謝しなさいよ…って、気を失つてたか

…」

僕「いや、もういいです。先生に説明してくれば…」

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8941u/>

猫耳事件

2011年8月24日21時24分発行